

1. 授業を構想するにあたって

歴史的分野における「日清・日露戦争」についての学習では、国内外の反応について扱う必要がある。ポーツマス条約という結果に対する国内の反応を考察する際、日露戦争の戦費や犠牲を日清戦争のものと比較する活動が考えられるが、教科書や資料集では、国内全体の統計を資料として提示することが多い（図1）。

しかし、今年度、本校の社会科で研究を進めている「エンパシーを働かせた考察」を生徒に行わせるためには、別の角度からの資料が必要ではないかと考えた。

図1 日清戦争と日露戦争の比較（浜島書店の資料集）

日本の データ	日清戦争 ←p.158 (1894～95)	日露戦争 (1904～05)
	兵 力	24万616人 —— 4.5倍 → 108万8996人
死 者	1万3488人 —— 5.9 —→	8万人以上
戦 死	1417人 —— 42.3 —→	約6万人
病 死	1万1894人 —— 1.7 —→	約2万人
病気入院者	不 明	25万人以上
負傷入院者	不 明	約13万人

2. 単元構想と資料

単元を構想するにあたって、日露戦争という事象に対して、自分の意見をもつ活動を2回取り入れた。第3時では、戦争が起こる前の背景に注目させ、第5時では、戦争のあらましや結果にも注目させた。また、第4時には、「一般国民」、「富裕層（地主や財閥）」、「アジア」、「欧米列強」の4つの立場に分かれ、日露戦争の結果を多角的に捉えるジグソー学習を行った。

時数	○学習課題 ○中心となる発問
1	○19世紀後半から20世紀にかけて国際情勢はどう変化したのだろう。 ○大国との戦争で、日本は何を得て、何を失ったのだろう。（単元を貫く問い合わせ）
2	○清に勝って、何を得たのだろう。 ○日本は三国の干渉に従うべきか。
3	○東アジアの情勢はどう変わったか。 ○日本はロシアと戦うべきか。
4・5	○日露戦争の結果はどうだったか。 ○それぞれの立場は、この結果をどう受け止めたのだろう。 ○日本はロシアと戦うべきだったのか。

第4・5時の授業では、生徒がよりエンパシーを働かせて、日露戦争下の国民の境遇を考察できるよう、冒頭に提示した資料（図2）以外に、藤枝市と島田市の学区ごとの戦死者数を提示した（図2）。

図2 藤枝市と島田市の

日清戦争と日露戦争の戦死者数の比較
(藤枝市史、島田市史)

日清戦争の戦死者数

藤枝の戦死者 17名	島田の戦死者 12名
藤枝 2人 青島 2人	島田 5人
広幡 3人 大洲 1人	六合 4人
葉梨 0人 高洲 1人	大津 0人
稻葉 1人 西益津 2人	大長 0人
瀬戸谷 0人 岡部 3人	伊久美 1人
	朝比奈 2人 初倉 2人

日露戦争の戦死者数

藤枝の戦死者 103名	島田の戦死者 68名
藤枝 12人 青島 19人	島田 30人
広幡 10人 大洲 7人	六合 8人
葉梨 8人 高洲 10人	大津 3人
稻葉 6人 西益津 9人	大長 7人
瀬戸谷 8人 岡部 11人	伊久美 7人
	朝比奈 3人 初倉 13人

各市町村の役所や近所の人々で、戦死した兵隊の遺族を支援した。



岡山公園（藤枝）

大井神社（島田）

3. 生徒のあらわれ

第4時の授業で、「一般国民」の立場で考察を進めた生徒の多くは、図2の資料に注目していた。ある生徒は、国民の視点から、日露戦争の結果を次のように捉えた。

日露戦争は引き分けで、賠償金が支払われていない。日本は戦争でお金が足りないため、国民に増税するしかない。税は2倍ぐらい上がり、国民はすごく辛いし生活も苦しくなっている。しかも、国民の中には家族がしんでしまった人もいる。「政府は自分たちのことを考えずにただ戦争をしているだけだ！」となって、各地で暴動が起きていたりするし、国民が新たにデモとか政党をつくるのかなと思った。

他の立場を担当した生徒に説明をする際には、「同じ学区で10人も亡くなっているって考えると、すごく辛くなってくるね」、「近所のお兄さんとか、知り合いも亡くなっているかもって想像しちゃうね」という発言があ

った。「焼津市はどうだったのか」、「静岡県内では、条約の反対運動はなかったのかな」といった、次の問い合わせをもつ生徒も見られた。

また、第3時と第5時では「ロシアと戦う」ことについての自分の意見をもち、討論を行った。第3時では、当時の国際情勢や対外関係に注目し、「戦うべき」という主張が多数派であった（写真1）。しかし、第5時では、国民感情に焦点化した議論が行われる場面があり、先に述べた「実際の身近な人の死」が、生徒の意見を変容させた。結果、「戦うべきだはなかった」という主張が多数派になる結果となった（写真2）。

4. 成果と課題

客観的な数字に注目させるだけなら、図1の資料で事足りるだろう。「多大な犠牲と戦費（そのための増税）に耐えたのに、賠償金を得られなかつたから、反対の運動が起つた」という理解に行きつくだろう。しかし、当時の人々の立場や境遇を具体的に理解し、思いに迫る考察を行おうとするならば、生徒の生活圏の範囲に即した資料も効果的であると考えた。歴史的事象の表面を追

うだけでなく、その先の、人々の思いに迫った理解を深める効果があると考えられる。

一方、生徒の書いた追究用紙を分析していくと、図2の資料の情報を活用した記載は多くなかつた。情報を読み取ること、当時の人の思いを想像することはできても、それを根拠として使うことの難しさを生徒が感じていると考える。客觀性を重視するあまり、データとして表れない部分を考察の材料にしていくことは勇気がいることかもしれない。今後は、エンパシーを働かせて考察したことを、生徒の思考にどう活かしていくかを考え、単元構想や問い合わせの吟味が必要だと考えられる。

この単元は、中学3年生になって最初の単元となつたが、今回の単元構想と資料の提示により、「エンパシーを働かせた考察」とはどのような思考過程なのか生徒と共有することができた。今後も、生徒と授業をつくりあげる中で、単元構想・問い合わせ・考える上で情報を探していきたい。

写真1 第3時の板書

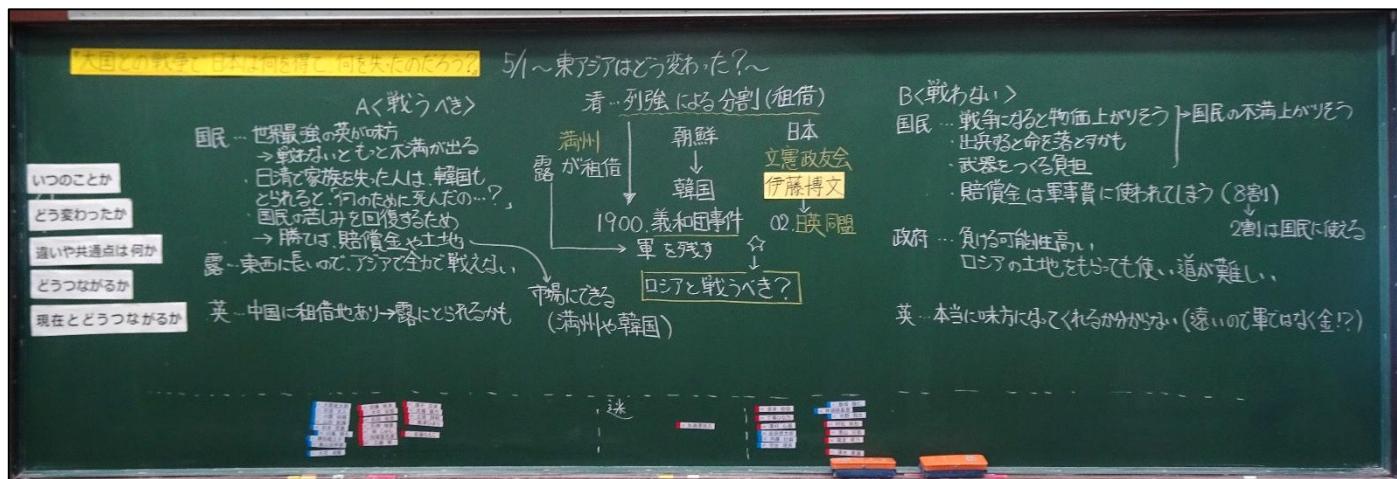


写真2 第4時の板書

